

学級研究が捉える学級集団の有り様に関する一考察

内田沙希

1. はじめに

本稿の目的は、これまでの学級研究が、学級を成り立たせている要因として、学級集団の有り様をどのように捉え、扱ってきたのかを検討することである。

日本の学校では、様々な子どもたちが集まる学級において、人と人の関わりを踏まえながら、人格形成や学業達成などの教育実践が効果的に行われるようにするためにどうしたらいいのかということが常に考えられ、様々な研究や実践論が展開してきた。安藤によれば、学級を対象とする研究には、研究的視線の違いによって主に3つのタイプに分けられる¹。1つ目が【理念実現型実践研究】、2つ目が【要因分析的研究】、3つ目が【実態把握的研究】である。【理念実現型実践研究】とは「実践志向の強い現場からの研究」、つまり「実践を『学級経営論』へと文字化していくための研究」である。【要因分析的研究】は、「そこで明らかになった要因を帰納的に考えることで、学級経営論につながっている」のであり、「より良い学級経営論を探ることを目的とする研究」である。それらに対して【実態把握的研究】は、「学級で生起している現象をありのままに記述し、そこでの人々の了解／解釈を明らかにする」研究であり、「現在採用され自明化している学級経営の客観視を促すので、学級経営の功罪を告発する研究にもなりえるし、学級経営の苦勞に報いる研究にもなりえる」とされる。これらの3つのタイプの発現傾向は、【理念実現型実践研究】がいつの時代にも発現する一方で、時代とともに【要因分析的研究】、【実態把握的研究】へと関心が移行しているという。

本稿では、以上の3つのタイプの研究において、学級を成り立たせている要因として、学級集団の有り様がどのように捉えられ、扱われてきたのかを整理する。日本の学級は生活共同体論として語られてきたとされるものの、個々の研究領域の中で議論が完結してきた傾向にあり、それぞれの領域が、日本の学級研究の流れの中でどのように展開してきたのかが十分に検討されてきているとは言いがたい。よって、それぞれの議論の中で、学級を成り立たせている学級集団の有り様がどのように捉えられ、扱われているのかに焦点を当てることで、一つの流れを提示することができると思う。

さらに、学級集団の有り様がどのように捉えられてきたのかを検討するにあたって、共生の観点を取り入れる。共生の観点から日本の学級研究の展開を見てみると、それぞれの時代状況において、学級での様々な関係性を踏まえながら学級を成り立たせていこうとする志向性があり、学級においてより共生的なものをめざそうとする運動として捉えられることが見えてくる。このことは、人と人の関わりを踏まえながら様々な理論や手立てを検討してきた日本の学級研究に1つの示唆を与えてくれると考える。

よって、本稿では、これまでの学級研究が、学級を成り立たせている要因として、学級集団をどのように捉え、扱ってきたのかを整理するとともに、それらを共生の観点から検討することで、今後の学級研究の課題を提示したい。

¹ 安藤知子(2013)「第7章 学級を対象とする研究の領域とアプローチ」蓮尾直美・安藤知子編『学級の社会学—これからの組織経営のために』ナカニシヤ出版

2. 学級研究が捉えてきた学級集団の有り様

本稿では上記の3つのタイプについて、【理念実現型実践研究】として、大西忠治の集団主義的学級づくり論、片岡徳雄の個を生かす集団づくり論、Q-U (QUESTIONNAIRE-UTILITIES:「楽しい学校生活を送るためのアンケート」)を用いた研究、【要因分析的研究】として、ソシオメトリーを始めとした社会心理学的研究、【実態把握的研究】として、ニューカマーや障害児の学校適応に関する研究を取り上げる。それぞれの研究において学級集団がどのように捉えられ、扱われてきたのを整理すると、学級を成り立たせている要因として、主に3つの同質性に目が向けられ、議論されてきたことが指摘できる。3つの同質性とは、①<1つの学級集団としての意志を持つという同質性>、②<同じ目的やきまりを共有しているという同質性>、③<文化的な同質性>である。

(1) 【理念実現型実践研究】が捉える学級集団の有り様

①大西忠治の集団主義的学級づくり論

大西の集団主義的学級づくり論では、貧困や差別という社会状況を背景として、<1つの学級集団としての意志を持つという同質性>に焦点が当てられてきた。

もともと大西は、「生きるということ自体が、常になんらかの意味で常に集団の中に生きるということであり、[略——引用者]個人を集団から切り離してとらえることはできないという立場」であったが、1960年代当時の60人近い学級において、生徒たちは5、6人の小グループとしてしか仲間としての親密感を持ち、接触し合っているという感覚を持っておらず、同じグループ以外は、同じ集団に属しているという意識すら持っていないという無関心が存在していた²。また、大西は、無着成恭の『山びこ学校』や生活綴方の実践から影響を受けつつも、教師としての自らの無力さを自覚していた³。生活綴方では、教師の権威が前提としてあり、そこからの一人ひとりの解放を目指していたが、すでに生徒たちは「自然発生的に結ばれあったいみでの集団として存在しているのではないか」⁴と考えた。

大西はそれらの課題に対して、「班づくり」、「核づくり」、「討議づくり」を実践することによって、生徒たちに集団がどのようなものなのかを学ばせ⁵、「集団のちから」を自覚させようとした⁶。「班づくり」、「核づくり」、「討議づくり」は、自分が日常的に接触しない部分をも学級が持っているということを生徒たちに意識させ、学級全体を集団として認識させるために、生徒たちの接触を恒常的につくり出すものとして意図された。とりわけ生徒の接触のあり方として特徴的なのが、班内部でのゴタゴタ、矛盾、対立を積極的に肯定する、もしくはむしろ生み出していくというところであり⁷、ゴタゴタ、矛盾、対立を通じて、集団としての自己統一、団結を自覚させようとしてきたことが伺える⁸。

² 大西忠治 (1984)『班のある学級』ほるぷ, p.84

³ 大西, 前掲書, p.21, 強調原文

⁴ 大西, 前掲書, p.21

⁵ 大西, 前掲書, pp.46-7

⁶ 大西, 前掲書, p.21

⁷ 大西, 前掲書, p.52-4

⁸ 大西, 前掲書, p.170

②片岡徳雄の個を生かす集団づくり論

片岡の個を生かす集団づくり論は、いじめや不登校が社会問題とされる中で、大西らの集団主義的教育が、個を潰し、権威主義的な人格を生み出すとして批判し⁹、個性尊重の観点から「同じ目的やきまりを共有しているという同質性」に焦点を当てて、集団づくりを行おうとした。

片岡は、集団主義的教育に対する批判と脱学校論に対する批判を通じて、社会教育の視点から学級を捉えた¹⁰。学習という共通な対象についての共有の利害・関心を持つ学習集団において、教師の意図的指導によって教師と児童生徒が準拠枠を共有し、共通な態度を生み出す準拠集団を形成しようとした。そこには、「一人一人のメンバーが個性的なほど、よい集団である」や、「個性は集団の中においてはじめて認識される」¹¹との見方があり、「ひとりひとりの個性」を尊重することで、多様な個人にとっての準拠集団にしようとした。以上のような集団を形成するための指導技術としては、①「よりどころ」となる集団づくり、②「創る」集団づくり、③「支持的風土」の集団づくり、④「容認」と「内省」の集団づくり、⑤「一人一役」の集団づくりという5つが重要であるとした¹²。

③Q-Uを用いた研究

Q-Uを用いた研究では、不登校、いじめ、学級崩壊といった社会状況を背景としながら、「同じ目的やきまりを共有しているという同質性」を基本として学級集団が検討されている。

Q-Uは、「子どもたちの学校生活での満足度と意欲、学級集団の状態を調べる質問紙」であり、河村茂雄が1995年に開発したものである。この調査は、「不登校・いじめなどの不適応の可能性を抱えている子ども、学校生活の意欲が低下している子どもの早期発見」と「学級崩壊に至る可能性や学級集団の雰囲気をチェックして、対応の方策を得ること」を目的としている。基本的に、教育実践の効果を比較するために年に複数回実施する。尺度は、「承認」と「被侵害」の2軸で学級における子どもの対人関係を測定する「学級満足度尺度」と「子どもが何に対して意欲が高いか」を測定する「学校生活意欲尺度」を用いる。

河村は、学習指導要領や学級経営に関する先行研究から、望ましい学級集団の4つの要素として、「Ⅰ：集団内の規律、共有された行動様式」、「Ⅱ：集団内の子ども同士の良好な人間関係、役割交流だけでなく、感情交流や内面的なかかわりを含んだ親和的な人間関係」、「Ⅲ：一人一人の子どもが学習や学級活動に意欲的に取り組もうとする意欲と行動する習慣、同時に、子ども同士で学び合おう姿勢と行動する習慣」、「Ⅳ：集団内に、子どもたちの中から自主的に活動しようとする意欲、行動するシステム」を挙げている。さらに、これら4つの要素を満たした状態、かつ学力の定着度が高く、学級生活の満足度が高い学級を、日本型の理想の学級集団として定義し、構造を検討している。

観察により理想の学級集団の条件を満たしている学級を取り上げた結果、「A)個人の士

⁹ 片岡徳雄・南本長穂（1986）『一人一役の学級づくり・授業づくり』黎明書房、p.72

¹⁰ 片岡徳雄（1981）『学級集団の構造—その人間関係的考察—』p.26

¹¹ 片岡・南本、前掲書、p.67

¹² 片岡・南本、前掲書、p.78

気と同時に集団士気が高まっている」、「㊸集団生産性が高まる取組み方法・協同体制・自治体制が確立している」ということが、学級集団の状態として顕著に観察されたとする。さらにその状態を成立させている集団の要因として、「㊶集団斉一性が高くなっている」、「㊹集団内の子どもたちの自己開示性と受他性が高まっている」、「㊺集団凝集性が高まっている」という3点が挙げられ、状態を能動的に維持している要因として「㊻集団機能・PM機能が子どもたちの側から強く発揮されている」、「㊼㊽を強化する集団圧が高まっている」の2点、㊶～㊸までの要因を支える規定要因として、「㊾集団同一視が強まっている」という点を挙げている。

河村は、個々の多様性が理想の学級集団を危うくするという指摘しており、理想の学級集団の状態にするためには、「学級に集まった子どもたちが、ものの考え方・価値観、行動の仕方につながる生活習慣、似たような感情にいたるような生活体験を、ある程度同じように共有していることが求められる」と述べている。

(2) 【要因分析的研究】が捉える学級集団の有り様

① ソシオメトリーを始めとした社会心理学的研究

ソシオメトリーを始めとした社会心理学的研究では、学級集団の有り様を捉える上で、<同じ目的やきまりを共有しているという同質性>に着目している。

ソシオメトリーを用いた研究では、「社会的共感性」の発達と変容を分析することで、学級における社会的共感関係を捉え、成員相互の社会的共感関係の類型が進級とともにどのように変容しているのかを明らかにし、それを通じて一人ひとりの子どもの指導法を検討している¹³。

また、ソシオメトリーを応用したものとして、D.H.ハーグリーブスの資源概念を用いた研究では、子どもたちは学級という集団の中に性格特性、技能、所有物といった「財産」を持ち込み、その「財産」が集団の課題達成に貢献すると成員に評価されることによって「資源」となり、「資源」を持っている成員ほど「勢力」が強く、「人気」も高まるとされる¹⁴。さらに、「資源」とそれに依存する集団構造は、集団文化が変化すれば評価される「資源」も変化し、その結果2つの次元から成るインフォーマル構造が再編制されると考える。さらに、教師は、学級内で多様な価値観を承認することが求められるとともに、友人グループの影響を上手く用いることで、子どもに新たな「資源」の獲得を期待することができるとの指摘もされている¹⁵。

(3) 【実態把握的研究】が捉えてきた学級集団の有り様

① ニューカマーや障害児の学校適応に関する研究

ニューカマーや障害児の学校適応に関する研究では、同質性の高い生活共同体としての日

¹³ 田中熊次郎 (1965) 「学級社会における『社会的共感性』の発達と変容—教育心理学におけるソシオメトリー発展の方向—」『教育心理学研究』Vol.3, No.3, pp.133-45

¹⁴ 西本裕輝 (2000) 「学級における子どもの資源と地位ヒエラルヒー—D.H.ハーグリーブスの集団分析枠組の検討を中心に—」『琉球大学教育学部紀要』Vol.56, pp.115-28

¹⁵ 池田曜子・渋谷真樹 (2003) 「学級における資源の活用と友人グループ—小学校でのエスノグラフィ—を通して—」『教育実践総合センター紀要』Vol.21, 奈良教育学大学教育学部総合実践センター, pp.61-70

本の学級のあり方に批判を呈してきた。ニューカマー障害児の学校適応に対して、日本の学校文化がどのような影響を及ぼし、どのように疎外してきているのかという現実を明らかにしたり、子どもたち自身がどのように学校適応してきているのかを明らかにしてきた。さらに、これまで排外主義的な閉鎖性を持っていると考えられてきた日本の学級が、同じ共同体の成員としてニューカマーや障害児を受け入れていたという事実において、むしろ子どもたちの学校適応に有効であったことが示されてきた。これらの研究では、学級集団の有り様を捉える上で、＜同じ目的やきまりを共有しているという同質性＞と＜文化的な同質性＞の2つに着目している。

まず、ニューカマーや障害児の学校適応に関する研究では、学級における「同質化」の問題と「個人化」の問題を指摘してきた。ニューカマーの子どもたちを対象としたエスノグラフィーを行った志水宏吉¹⁶によれば、「同質化」とは、教室の中でニューカマーや障害児の「異質性」を極力排除しようとする傾向が高く、「私のクラス」や「われわれの学校」に所属する同質的集団の一員として扱いかかわろうとすることである。また、「個人化」とは、クラスや学校の中で生じる学習指導上や生活指導上の問題の原因を子ども自身に帰属させるということである。このことは、歴史や社会的な要因に由来する差別や不平等の問題を個々の家族や個人の資質の問題に帰してしまう可能性を有しているという。

一方で、学級における「同質化」や「個人化」への批判に対しては、ニューカマーや障害児が、日本の学校の同調圧力に一方的に押される受動的な存在として扱われてきたとの指摘もある¹⁷。森田京子は、ニューカマーの学校適応を左右する2つの要素を提示しており、「同級生との互惠関係によって形成される心地よい自己アイデンティティ（対人相関アイデンティティ）」と、「他の『異なる』生徒たちと選択的に付き合うことで自己防衛をはかる周辺者同士の力学（マイノリティー内ポリティックス）」の2つが重要になることを明らかにしている¹⁸。さらに、2つの要素を踏まえて、これまで同質的・同化的とみなされがちで、排外主義的な閉鎖性を持っていると考えられてきた日本の教育システムは、「日本人で構成される学級集団が、国籍・民族の異なる外国人同級生を、同じ共同体に属する成員として受け入れていた事実」において、むしろ平等主義的な受容性を持つと述べる¹⁹。

3. 学級研究の展開とプロセスとしての共生

(1) 学級集団の有り様の捉えられ方とその展開

以上より、これまでの学級研究が、学級を成り立たせている要因として、学級集団の有り様をどのように捉えて、扱ってきたのかを整理すると、①＜1つの学級集団としての意志を持つという同質性＞、②＜同じ目的やきまりを共有しているという同質性＞、③＜文化的な同質性＞という3つの同質性に着目しながら展開してきたと言える。

¹⁶ 志水宏吉 (1999) 「外国人のいる教室」『のぞいてみよう！今の小学校—変貌する教室のエスノグラフィー』有信堂, pp.103-46

¹⁷ 児島明 (2006) 『ニューカマーの子どもたちと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房, pp.135-75

¹⁸ 森田京子 (2007) 『子どもたちのアイデンティティ・ポリティックス—ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィー』新曜社, p.271

¹⁹ 森田, 前掲書, p.291-302

大西の集団主義的学級づくり論は、管理主義的教育を批判するとともに、一人ひとりに対応する生活綴方を乗り越えようと、＜1つの学級集団としての意志を持つという同質性＞に基づいて学級づくりを行ってきた。当時の学級が60人近い人数であったことや、貧困の問題を抱える子どもたちや、学業達成が非常に厳しい子どもたちが多くいたために、1つの学級集団としての意志を持つことによって、貧困や差別ある社会を変革できるような集団になることがめざされていたからである。集団主義的教育の実践者の多くが、「集団主義的経験を子どもたちに計画的に与えることで、団結と協力、力としての集団の思想と行動を育て、それによって、教育における人間疎外の状況—能力主義の教育、差別による人格支配、軍事主義的人格づくり—を克服し、もって社会の変革をめざす、このようなことをねらい」とする「革新の政治思想」に支えられていたという指摘からも確認できる²⁰。また、生徒たちが同じグループの人たち以外には無関心で、自分が日常的に接触していない部分をも学級が持っていることを意識していなかったことなどから、生徒たちの接触を恒常的につくり出すとともに、班内部や外部でのゴタゴタ、矛盾、対立を積極的に肯定してきた。そして、ゴタゴタ、矛盾、対立を通じて、集団としての自己統一、団結を生み出そうとしてきた。

それに対して、大西のようなく1つの学級集団としての意志を持つという同質性＞では、個を潰し、権威主義的な人格を生み出すと指摘し、＜同じ目的やきまりを共有しているという同質性＞から学級集団を捉えようとしてきたのが、片岡の個を生かす集団づくり論である。片岡は、集団主義的教育や脱学校論への批判を通じて、社会教育の視点から準拠集団としての学習集団づくりを行った。とりわけ、1980年代半ばにいじめや不登校が問題になってくると、集団主義的教育の問題を強く主張し、「ひとりひとりの個性の尊重と、学級集団の統合の実現」²¹をめざしたのである。また、片岡と同様に、＜同じ目的やきまりを共有しているという同質性＞を捉えようとしてきたのが、ソシオメトリーを始めとした社会心理学的研究とQ-Uを用いた研究である。ソシオメトリーを用いた研究は、生活共同体としての学級づくりをするために学級経営研究においても度々紹介されてきていて、児童生徒の人間関係を把握し変化させることで、人格形成を促すような学級づくりをめざしてきた。また、資源概念を用いた研究では、集団によって評価された個々人の資質や特徴といった「資源」に注目し、学級構造を把握しようとしてきた。

なお、Q-Uを用いた研究は、いじめや不登校への対応はもちろんのこと、学級崩壊を防ぐためにQ-Uが使用されているということから、壊れてしまうかもしれない学級をいかに維持させ、機能させるかということに焦点が当てられている。よって、理想の学級集団として同質性の高いまとまりのある学級をめざすことになり、個々の多様性に対して危機感をも示している。

そこに新たな要因を提示したのが、ニューカマーや障害児の学校適応に関する研究である。これらの研究は、個人と集団との統合や関係性を重要視し、同質性の高い生活共同体として定着していった日本の学級のあり方に対して、多文化に配慮することで批判を呈してきた。ニューカマーと呼ばれる外国からの子どもたちや、障害のある子どもたちに焦点

²⁰ 片岡徳雄(1979)『学級集団の経営一個の自由を求めて—』ぎょうせい, p.26

²¹ 片岡・南本, 前掲書 p.72

を当てることで、学級における多文化な状況を明らかにするとともに、多文化に対してどのように教師や児童生徒が対応しているのかということ明らかにしてきた。これらの研究では、学級集団の有り様について、＜同じ目的やきまりを共有しているという同質性＞と＜文化的な同質性＞の2種類の同質性が捉えられてきた。

(2) 学級集団における「差異」と3つの同質性

なお、ここで重要なことは、3つの同質性の展開が、学級集団における「差異」との関係の中で生じているということである。

もともと大西の集団主義的学級づくり論で捉えられてきた＜1つの学級集団としての意志を持つという同質性＞は、生徒にとって自分が日常的に接触していない部分を学級集団が持っていることを前提として、あえて生徒たちの接触を恒常的に作り出し、班内部や外部でのゴタゴタ、矛盾、対立を経験させようとしてきた。しかし、学級経営論として発展し、様々なところで実践されていく中で、＜1つの学級集団としての意志を持つという同質性＞が個を潰すとして批判されるようになった。ここで、目を向けられた「差異」が、個々人の資質や性格、特徴の違いである。社会心理学的研究では、個々人の資質や性格、特徴によって学級集団の構造を把握しようとし、片岡の個を生かす集団づくり論では、これらの違いを理解し合い、認め合うことで学級を成り立たせようとしてきた。このことは同時に、個々人の資質や性格、特徴や人間関係が、集団としての学習や人格形成といった目的に貢献しているかどうか問われており、同じ目的やきまりを共有しているという同質性が必然的に求められることとなった。

また、ニューカマーや障害児の学校適応に関する研究では、文化的な「差異」に目を向けることで、同質性の高い生活共同体としての日本の学級の有り様を批判してきたといえる。ここでは、教師や周りの児童生徒の対応によって、同じ目的やきまりを共有しているという同質性が求められたり、文化的な同質性が強調されたりすることが示される一方で、逆にマイノリティーが学校適応をするにあたって、自分の資質や特徴を協同生活に貢献的に活用することで適応したり、マイノリティー同士で文化的な同質性を戦略的に活用することで適応したりしていたことが明らかとなってきた。

つまり、これまでの学級研究は、学級を成り立たせる要因として、「差異」と同質性の観点から学級集団の有り様を捉えてきたと指摘できる。

(3) 学級研究の展開とプロセスとしての共生

これまでの学級研究は、学級を成り立たせている要因として、①＜1つの学級集団としての意志を持つという同質性＞、②＜同じ目的やきまりを共有しているという同質性＞、③＜文化的な同質性＞という3つの同質性に着目しながら学級集団の有り様を捉え、展開してきた。そのような学級研究の展開は、当時の社会状況を踏まえながら、その時代における学級のよりよいあり方をめざすとともに、社会の中で生きるということを経験する児童生徒に学級を通じて教育することをめざしてきたと言え、「プロセスとしての共生」と捉えられる。

野口は、『共生』は、それに向かって絶えず求めていくべきプロセスであって、『われわれは共生している。何も問題はない』といったとたんに、欺瞞的な言説になってしまう」

と述べている²²。つまり、共生とは、ある現状に対して「共生していない」という異議申し立てが不断なく繰り返される終わりなきプロセスである。なぜなら、ある当事者にとっては「共生している」と肯定できたとしても、別の当事者にとっては「共生していない」という可能性が常に残されるのであり、誰も「共生している」という判断を定めることが不可能だからである。つまり、共生は、価値志向的な行為のプロセス概念であり、それ自体として共生の実現度合いを計るような普遍的な尺度にはならない²³。

学級研究の展開も、異議申し立てが不断なく繰り返される終わりなきプロセスである。学級集団の有り様が、＜1つの学級集団として意志を持つという同質性＞として捉えられると、個々人の資質や性格、特徴といった「差異」から意義申し立てがなされ、今度は＜同じ目的やきまりを共有しているという同質性＞として捉えられるようになると、文化的な「差異」から意義申し立てがなされてきた。このことは、これまでの学級研究の展開自体が共生的な営みであると指摘できる。

4. 今後の課題

本稿は、これまでの日本の学級研究が、学級を成り立たせる要因として、「差異」と同質性の観点から学級集団の有り様を捉えてきたとともに、そのような学級研究の展開が、「プロセスとしての共生」として捉えられることを示してきた。

今後の課題としては、以下の2点を提示する。第1に、これまでの日本の学級は同質性の高い生活共同体として語られてきたが、学級集団の有り様として捉えられてきた同質性の中身はそれぞれの研究によって異なるのであり、今回扱えなかった学級研究を含めて、改めて日本の学級や学級経営の特徴を検討する必要がある。第2に、学級研究ごとにそれぞれの立場から学級集団の有り様が捉えられてきたが、それぞれの枠組みの中でしか分析されていない可能性があり、「同質性」の3つの捉えられ方が実際の学級においてどのように活用されたり、認識されたりしているのかを明らかにする必要がある。

²² 野口, 前掲書, p.29

²³ 野口・柏木, 前掲書